

新人MSW(医療ソーシャルワーカー)2年目の抱負

聞き手:医療福祉支援センター長(小林利彦)

2018年4月に新人のMSW2名(鈴木任哉・松村奈緒美)を迎えて1年が経過しました。初々しい顔つきのもと緊張しきっていた日々の対応も少しずつ落ち着き、任される仕事もだんだん増えてきたように思えます。今回は、お二人に2年目に向けた抱負を語っていただきます。



鈴木任哉

皆さまこんにちは。平成最後の冬が終わり、新しい元号とともに再び春が訪れました。毎年、年の終わりには「一年を表す漢字一文字」が清水寺で発表されますが、平成最後の漢字は「災」でした。地震や台風、

猛暑など日本各地で大きな被害が報告されるなか、浜松市でも地域によっては数日間におよぶ停電が発生しました。実際、私の家も3日間停電し、電気の大切さを改めて実感した次第です。幸い大学病院の周辺は停電の影響がほとんどなかったのですが、個人的には若干の羨ましさを感じながらも、医療機関という、人命を預かる重要な職場(施設)で自分自身が働いていることを改めて認識しました。

私は、社会福祉士として、浜松医科大学医学部附属病院「医療福祉支援センター」の相談室で社会人の1年目を過ごしましたが、この1年間、学ぶことだらけで、先輩方にはずいぶんとご迷惑をおかけしたかと思えます。それでも、院内で現在関わっている「退院支援」や「医療費の相談」、「各種制度の紹介」等の業務を通じて、患者さんやご家族の不安および悩みなどが少しでも解消できれば良いなどの思いで日々働いています。

新元号は「令和」ということですが、この1年間が何事をするにも良い月(令月)となり、皆さんが平和で過ごせるように微力ながらもお役に立てるよう自己研鑽していきます。



松村奈緒美

私は現在、医療ソーシャルワーカー(社会福祉士)として「退院支援」や福祉に関わる様々な支援業務に携わっています。社会人としての1年目を病院という特殊な職場で迎えることになりましたが、正直、

病気やケガをするとどんなことに困るのかも分からず、想像が及ばないことばかりでした。非日常ともいえる「入院する」という出来事が、仮に制度を利用しても決して安価なものではないこと、その一方で、急性期病院には長期間入院することができないこと、介護を必要とする状態で自宅への退院あるいは他施設に転院するにも様々な調整が必要であるということ、改めて肌で感じることができました。初めて入院する患者さんやご家族にとっては、きっと驚くことばかりであり、日々直面する問題に動揺される方も多いように感じます。現在、そのような職場で働きながら、自分自身がどうお役に立てるのか日々悩みながら過ごしています。

病院には乳児から成人そして高齢者まで、様々な患者さんが連日訪れてきますが、今の私には毎日の経験が大きな学びの機会ともなっています。相談員としてはまだまだ未熟ですが、精いっぱい励んでいきますので、これからもよろしくお願いします。